

醍醐寺蔵 貞慶作三段式『如意輪講式』解題と翻刻

柴 佳世乃

総本山醍醐寺（京都市、真言宗醍醐派）に、三段式の『如意輪講式』が蔵されている。^①本三段式は、澄憲（一一二六～一二〇三）が作成した七段式『如意輪講式』^②の改作である。七段式の式文を適宜省略することで、美しな文言や意味内容を損ねずに三段に仕立てたものである。この三段式が複数本、醍醐寺に蔵されており、うち一本の書き付けに「此の式、解脱房の草か」（原漢文）とある。すなわち、解脱房貞慶（一一五五～一二一三）の作とも目されてきた作品である。^③私に内容および書写伝来を検討したところ、本三段式は貞慶の真作である可能性が高いとの結論に至った。

本稿では、そうした資料的価値に鑑み、解題とともに翻刻紹介するものである。

【解題】

三段式『如意輪講式』は、澄憲作七段式『如意輪講式』から、表白・第四段（本願利益門）・第六段（如意福德門）・第七段（往生極樂門）を用い、^④各段においては文言を適宜抄出して三段式に仕立てた、いわば澄憲の七

段式の簡略版である。しかしながら、その改作は、七段式の内容や修辭を十二分に理解した上で行われており、まことに的確な抄出と言える。全七門のうち、主要門にあたる三門を選び取り、各門の式文を整えるにあたっては、対句構造を把握しつつ、文意を損ねないように省略を施し、中途の文言には文字句の修正や付加を一切していない。そのようにして整えられた三段式『如意輪講式』は、一個の作品として完成度の高いものとなっている。おそらく、七段式は長大で、法会で営むには大がかりとなるため、より実用に即した作品として改編されたものであろう。ちなみに、澄憲の七段式は他に、五段式（魚山叢書本）に、あるいは別の三段式に改作が行われ、今に伝来している。それらは文言が増補されたり、省略が施されたり、各段が結合されたりして、七段式の状態は必ずしもそのままではない。澄憲の七段式の影響や流布を物語るものとして貴重であるが、それらの改変作品を傍らに置けばいっそう、原七段式に忠実な本三段式の特徴が浮かび上がるのである。

さて、この三段式が、醍醐寺には計三本残されている。

①二〇八函一六号『如意輪講式』卷子装一卷

②二一三函三五号『如意輪講式』断簡一紙

③二一五函一二号『如意輪講式』卷子装一卷

①は、現装において料紙表に『観音講式』、裏に『如意輪講式』が書写されている一巻である。この『観音講式』は貞慶作として知られる三段式⁵に他ならない。現装では裏として扱われている『如意輪講式』の方が書写が古く、後にその料紙の裏面に『観音講式』が写されたものと思われる。【書誌】に詳細を後述するように、『如意輪講式』が書かれた全五紙の裏面を使って、『観音講式』が書写されて、書ききれなかった式文を一紙（現装第五

紙) 継いで書いたという経緯が推測できる。なお、第二紙と第三紙の間に一紙欠落しており(式文が通らない)、欠落したまま紙が継がれている。表裏に両講式が書写された後に一紙が欠したものと考えられるが、その経緯や時期は不明である。

②は、断簡一紙であり、表裏にそれぞれ『観音講式』『如意輪講式』の中途の式文が記されたものである。料紙、式文の内容、料紙の継ぎ目の文字の残画より、①の欠損に該当する一紙であることが判明する。すなわち、①と②を合わせて、『如意輪講式』『観音講式』一巻が整うのである。後に掲げる翻刻では、この断簡を補完して『如意輪講式』を提示することとする。

③は、右の①+②の『如意輪講式』を書写した一巻と目される。しかしながら、振り仮名や送り仮名の記し方に違いも存するので、一字一句の忠実な写しではない。文和四年(一三五五)の書写奥書があり、これは①『観音講式』の貞治五年(一三六六)の書写を遡る。あるいは、①+②『如意輪講式』書写↓③書写↓①+②『観音講式』書写(『如意輪講式』裏)、という順が考えられるか。注目すべきは、第八紙(末尾)の端裏に、「此式解脱房草歟」と記されていることである。⁶⁾ 貞慶の名を載せる点で看過できない。本書は、現在において三段式の完本として貴重で、①②の式文を考える上で参考となるため、併せて翻刻を書誌と共に掲げる。

醍醐寺に蔵される三本の概略は、右の通りである。ここに三段式『如意輪講式』を貞慶の真作と見る理由は、大きく以下のことによる。

一、写本の書き付けに、貞慶作かとされていること。

二、『如意輪講式』が書写された後に、貞慶の『観音講式』がその料紙裏に書写され、表裏で伝来している

177。

三、澄憲作七段式の式文を周到に改作した内容を持つこと。

四、三段式『如意輪講式』の冒頭部が、貞慶『観音講式』と同一であること。

このうち、一・二については本稿に論じ、三・四についてはあらためて詳論するが、四についていささか触れておく。この三段式の表白冒頭は、左に掲げる通りである。

敬白大恩教主釈迦牟尼如来、十方三世一切三宝、殊大慈大悲観自在尊、補陀洛山無數聖衆^ニ而言、

これは、三段式が澄憲作七段式を唯一改変している箇所である。澄憲の七段式は、表白が以下のように始まる。

敬白法界法身摩訶毘盧遮那、実修実証盧舎那界会、一代教主牟尼薄伽、九品能化弥陀種覺、十方法界証菩提者、去来現在応正遍知、八万十二権実正教、無障礙経甚深妙典、観音勢至諸大菩薩、阿難迦葉諸大声聞、

殊^{ニハ}補陀落安養清浄集会、蓮華部中諸賢聖衆、惣^{テス}一心法界光明心殿、理性随縁塵刹海会、三宝、境界^ニ驚^{カシ}

言^{サケ}、

(大覚寺本を翻刻、私に句読点を付した。)

七段式がいかに長大で重厚であるかがわかるだろう。三段式はおそらく、これをよりコンパクトに表現しようとしたのであろう。興味深いことに、この三段式の文言は、貞慶作『観音講式』の表白冒頭と全くの同一なのである。『観音講式』の当該式文は、次の通りである。

敬白大恩教主釈迦牟尼如来、十方三世一切三宝、殊大慈大悲観自在尊、補陀洛山無數聖衆^ニ而言、

(二〇八函一六号を翻刻、私に句読点を付した。)

表白の表現はある程度定型化されているが、その中にも多様なバリエーションが存する。そうした実態に即したとき、貞慶の著した式文と同一の文言から始まることは、本三段式『如意輪講式』が貞慶の真作であることの蓋然性を高めよう。貞慶は、自ら草した『観音講式』の表白冒頭を援用しつつ、全体を整えたと思しい（あるいは、三段式『如意輪講式』を作成して後、その文言を『観音講式』にも利用した可能性もある）。

本三段式は、澄憲の七段式『如意輪講式』の享受の様相がよくうかがわれると同時に、貞慶にとって血縁関係にある澄憲の作品への直接的関与が明らかになる点で、貴重な一作品である。内容にわたる検討は別稿に譲り、ここでは式文を翻刻紹介することで、全容を見渡す一步としたい。

注

- (1) ニールス・グリユベルクのWEBサイト「講式データベース」にも本講式は載せられており、学恩に与った。
- (2) 佐々木邦世「よみがえる「信の風光」——秀衡の母請託『如意輪講式』を読む」（中尊寺仏教文化研究所『論集』創刊号、一九九七年五月）に早く取り上げられている。中尊寺にて、二〇一六年六月二五日に本講式の復元法要が行われた（中尊寺「如意輪講式」法要パンフレット）。柴も委員として加わって式文訓読を行い、海老原廣伸師・室生述成師・近藤静乃氏と共に譜本作成の過程を担った。貴重な営みに参画させて下さった中尊寺貫首山田俊和師に深謝申し上げる。本講式については、柴「書写山圓教寺蔵『如意輪講式』解題と翻刻」（千葉大学『人文研究』四六号、二〇一七年三月）、柴「澄憲『如意輪講式』を読む——大覚寺蔵七段式の訓読——」（中尊寺仏教文化研究所『論集』第四号、二〇一七年三月）、柴「澄憲と『如意輪講式』——その資料的価値への展望——」（小峯和明監修、目黒将史編『日本文学の展望を拓く』第五巻、笠間書院、二〇一七年一月）にも論じた。

- (3) この書き付けについては、グリユベルクが既に言及している。澄憲作七段式との関係についても、「内容的には、澄憲作如意輪講式（七段）の改作と思われる。」と述べる。
- (4) この主要門の選択に則り、二〇一六年の中尊寺における『如意輪講式』復元法要では、表白・第四門・第六門・第七門・結章文という三段構成の法会が勤修された。法会では、各門において澄憲の七段式そのままの式文が唱えられた。現在、七段式全体の復元実唱に向けてプロジェクトが続行している。
- (5) 山田昭全・清水宥聖編『貞慶講式集』（山喜房佛書林、二〇〇〇年）に、三段式『観音講式』の翻刻と研究がなされている。
- (6) グリユベルクは、前掲注(1)にて、「貞慶作カについて」として、以下のような考察を行っている。
- 貞慶（解脱上人）作者説は、伝本の中に、ただ一本（醍醐寺（215/12）写1632年、奥1353年）^{Legend 7)}が「此式解脱房草敷」とある。この伝本は明らかに同寺に保管されている別本（醍醐寺（208/16/2）写鎌倉後期）の転写本であって、元になっている本は貞慶真作の観音講式（三段）と合併した合本であって、この真作の写本も「如意輪講私記」と、間違えやすい同題を持っている。
- 貞慶作かと注目していることに大いに示唆を受けた。なお、氏は、二一五函一二号が一六三二年（寛永八年）の写しであるとするが、紙背に記された当該の年記は寄進に関わるものであって、書写そのものは江戸初期を遡ると思われる。
- (7) 前掲注(2)柴「澄憲と『如意輪講式』——その資料的価値への展望——」に、表白の翻刻と内容の読解を行った。

謝辞

貴重な資料の閲覧および翻刻をご許可下さった醍醐寺座主仲田順和猊下に御礼申し上げます。閲覧にあたっては、醍醐寺当局の皆様にご高配賜りました。御礼申し上げます。

付記

本稿は、科学研究費補助金（挑戦的研究・萌芽17K18478）による研究成果の一部である。

翻刻は、次のような方針で行った。

- 一、漢字は通行の字体を用い、読解の便宜のため、私に句読点を付した。
- 一、行取りは底本に従った。
- 一、音読・訓読符は、印刷の都合上、省略した。
- 一、判読不能の字は□で示した。
- 一、行末に適宜、冒頭からの紙数を示した。一本は、断簡を含めて復元した紙数を示した。
- 一、行頭に冒頭からの行数を示した。

〈二〇八函一六号および二一三函三五号〉

【書誌】

○二〇八函一六号

卷子装一卷。

現装は、卷子の表に「観音講式」、裏に「如意輪講式」。原態は「如意輪講式」が表であったか。ここではひとまず、「観音講式」を表として順に紙数を数える。

料紙、楮紙打紙。第五紙のみ料紙異なる（楮紙）。

法量、縦 三一・〇糎。横 二一四・九糎（五紙継）。各紙は、現装の冒頭から①（第一紙、以下同）四四・二糎、

②五〇・〇糶、③五〇・〇糶、④四一・二糶、⑤二九・五糶。
軸無し、界線無し。「観音講式」「如意輪講式」ともに博士無し。

*「観音講式」(現装表面)

南北朝期の書写。第一紙冒頭、紙面上部破損。内題無し、尾題「如意輪講式」。尾題の前に、「貞治五年三月八日」(一三六六)の書写奥書あり。第五紙のみ料紙異なる。第四紙(原態の第一紙)までで書写が完了しなかつたため、一紙紙継ぎがなされたか。第二紙と第三紙の間に一紙欠落。

*「如意輪講式」(現装裏面)

鎌倉後期の書写。内題「如意輪講私記」。現装第四紙(原態の第一紙に相当)より墨付き。第三紙(原態第二紙)、第二紙(同第四紙)、第一紙(同第五紙)。第三紙と第二紙の間に一紙欠落。

〇二二三函三五号

断簡一紙。料紙、楮紙打紙(二〇八函一六号の料紙と同一)。

法量、縦 三一・〇糶。横 五〇・〇糶。

現装は、表(巻の内面)に「観音講式」、裏に「如意輪講式」。

文字の残画などを照合した結果、二〇八函一六号の一卷の断簡と認められる。第二紙と第三紙の間の一紙で、この一紙を補うと、「観音講式」「如意輪講式」ともに式文が完備する。

【翻刻】

1 如意輪講私記

先惣礼

歸命蓮花王 大悲觀自在 大自在吉祥 能施有情願

南無歸命頂礼大悲大聖如意輪觀自在尊十方

5 法界一切三宝

敬白大恩教主釈迦牟尼如来十方三世一切三宝、殊

大慈大悲觀自在尊補陀洛山無数聖衆ニ而言、

伏惟ハ、人中天上之浮花開落イヌハク幾ノ春ノ風ソ。苦海愛河之

流水沈浮チヌフヤム絞ノ夕ノ浪。善趣ニハ難ク生シ、惡道ニハ易歸リ者也。粵コ、ニ

10 稀ニ受ケ日域馬台之人身ヒキヲ、償タマ遇カ月支鵝王之教跡モトニ。然ニ

歲月消シヤリ傾カスク、孰期シレカコセム翼日之晷カケヲ。冥路稍近ツク、須スヘ蓄カクニ夜台

之粮カテヲ。茲以テ、偏ヒト仰ムテニ尊之級引ヒキヲ、願イソム三ツ禱ムニ二世之雍熙オウシヲ。夫

十方聖衆之中ニハ、觀自在ノ慈悲惟深重ナリ。六觀世音ノ内ニハ、

如意輪ノ利生モツトモケツエン尤モト揭ケツ焉ナリ。繇ヨデ是ニ今キマシ翅テ一座三門之講肆ウチヲ、

15 早ク預ムニ求而願之満足ニ。眼前ホコ誇コソテ不老之赤泉ニ、

醍醐寺藏 貞慶作三段式『如意輪講式』解題と翻刻

伴^{トトナ}楮葉之影^{チクヨウノカゲ}ニ、身後^{シノ}ニハ遊^{カウセウ}シテ迎接^{ウケゲ}之紫台^{シイダイ}ニ、俟^{マク}ムニ荷花^{カクワ}之

敷^{ヒキ}ヲ。懇篤^{コンコク}ノ志^シ不^ス能^ズ叢^{ソウ}脛^{ケツ}スルニ。具^{ツツ}旨^サ在^ルリニ仏陀^{ブツダ}之照覽^{シヤウラン}ニ而已^ニ。

今此講演略有三門。一者本願利益門、二者如意福

徳門、三往生極樂門也。

20 第一本願利益門者、夫此菩薩者、侍^{ツカヘ}テ多千億ノ仏ニ、

発^{ハツ}シテ大清淨ノ願^{ネン}ヲ、垂^{タレ}ニ憐愍^{レン}ノ方便^{ヘン}ヲ、施^セスニ降化^{カウカ}ノ神力^{シキ}ヲ。慈悲

之雲^{ヒヨク}眇々^{ミョウゾウ}トシテ、普^{アマ}ク澍^{ソク}甘露^{カンロ}之法雨^{ホウウ}ヲ、弘誓^{コウセ}之海漫々^{カイマン}トシテ、

広^{ウカ}ク浮^{ウキ}フニ濟度^{ジツド}之船筏^{センバツ}ヲ。無^ム縁^{エン}之慈悲^{ジイ}廣大^{コウダイ}ニシテ、無^ム親^{シン}モ一^ニ無^シレ

疎^{ウレキ}モ。無^ム作^{サク}之誓願^{セイガン}甚深^{シンシン}ニシテ、無^クレ始^シモ一^ニ無^シレ終^リリモ。本願^{ホンガン}云^フ、一切

25 衆生^{シュウジヤウ}作^{サク}シ仏^{ブツ}ニ畢^{ハシ}テ後^{ノチ}、我^ガ当^{トク}ニ成^ニ仏^ニス。若^シ残^ササニ一人^ニ者^ハ、誓^{チカ}フ四^シ不^ト三

取^トラ正覺^{テイカク}ヲ云々。又^シ如^シニ經^ニ云^フ、若^シ持^テニ念^ニ如意輪^ニ者^ハ、一切^ノ時^ト処^ト

皆^レ無^ク有^ルコト障礙^{サカイ}。於^テ内外^ノ行^ノ業^ニ、速^ニ円^ニ満^{シテ}、於^テ諸^ノ所作^ノ

事^ニ、常^ニ得^テ勝利^ヲ。威^イ光^{クワウ}増^{ゾウ}長^{チヤウ}、具^ク大自在^ニ、開^キ発^{ハツ}シテ智

恵^ヱヲ、得^テニ弁才^ニ語言^ニ三昧^ヲ。音^{オン}声^{シヤウ}美^ミ妙^{ミョウ}シテ、過^ク現^{ゲン}ノ一切^ノ罪^ノ障^ヲ

30 無^ク三^ニ不^トニ滅^セセ、現^{ゲン}当^{トク}ノ一切^ノ吉^ノ祥^ヲ無^クシト不^ト云^フコト至^ルニ云々。凡^ソ誓^セ願^ノ利^リ益^ヲ

無^ク量^{ナリ}。以^テニ要^ニ一^ノ言^ヲ之^ヲ、三^ノ業^ノ六^ノ情^ノ之^ヲ罪^ノ垢^ヲ、智^チ水^{スイ}洗^シテ而不^ス

留^ト一^ヲ。四^ノ重^ノ五^ノ逆^ノ之^ヲ業^ノ塵^ヲ、悲^ヒ風^{フウ}弘^{コウ}テ而^{シテ}無^ク殘^リコト。況^シ満^テテニ寿^ス命^{メイ}ヲ

「(第一紙、現装第四紙)

於千歲^ニ、招^ルカム敬愛^ヲ於万人^ニ。才智^{タケ}湛^ヘ北海^ヲ、巧^{ケウ}弁流^ス懸^{ケン}

河^ヲ。何況^{ユウ}、雖^モ決^ス定業^ヲリト、念^レ能^ク轉^シ之^ヲ、雖^モ墮^{スト}惡道^ニ、必^ズ代^テ

35 受^ク苦^ヲ。然^レ則^チ、振^{ルン}テ二十刀^ヲ折伏^シ之^ヲ、窺^シ獄率^ヲ一^ヲ、施^テ

一子慈悲^ノ德^ヲ、代^テ罪人^ニ入^ル鐵城^ニ者也。經^ニ云、若誦^{コト}如意

輪神呪^ヲ一遍^ニ、如^ク上^ノ諸事^皆悉^ク得^ニ成^ル弁^ト文^ヲ。又^云、假^ク令^ニ

仏眼^ハ墮^レ落^シ大地^ニ、無量^{億劫}不^レ還^ラ本^ノ處^ニ、大^ニ悲^ノ誓願

不^レ墮^{セシ}兩舌^ニ。又、若有^レ衆生^ニ、於^レ未^レ來^レ世^ニ、誦^シ持^セ此^ノ呪^者、以^テ

40 本願^ヲ一^ニ故^ニ、我^レ來^テ其^ノ人^前ニ、隨^テ所^レ望^ノ意^ニ、令^ム滿^ル一切^ノ無量^ノ

大願^ヲ。若^ハ少^ク若^ク多^ク、不^ハ果^ス遂^ス其^ノ悉^ク地^ヲ者、不^レ得^ニ名^ヲ為^ス如^ク意^ト」(第二紙、現裝第三紙)

宝珠^大秘密^呪文^ト。如^レ是[、]誓願^不思^議甚^深ニシテ、無^量

大^也。金^言不^誤、利^生無^疑。仍^大衆^以伽^陀可^讚

嘆^礼拜^{。頌}曰[、]

45 若我誓願^大悲^中 一^人不^成二^世願 我墮^虚妄^罪過^中 不^還本^覺捨^大悲

南^無歸^命頂^礼大^慈大^聖如^意輪^觀自^在尊

第二^如意^福德^門者[、]先^明本^誓悲^願。今^祈福^德

利益^ヲ。夫^冀樹^提伽^之勝^躑、開^キ福^田於^即生^ニ、伝^ニ迦

羅^越之^妙指^ヲ、招^カ宝^財於^現身^ニ。於^焉、幸^福尤^可願^ニ

醍醐^寺藏^貞慶^作三^段式[「]如^意輪^講式[」]解^題と翻^刻

50 貧賤^{セム}誰^{タレカ}不^レ厭^ハ之^ヲ。是以菩薩ノ六度ニハ闕^{カキ}檀度之^ヲ濟

行^ヲ、止觀五緣^ニ失^フ衣食之助道^ヲ一矣。出^ハ瞻^ミ二肩^ヲ一懷^キ下^レ劣^ル二等

輩^ニ之^ハ恥^チ、入^ハ屈^{クツ}膝^{ヒサ}無^シ顧^カ親^ニ族^{ツク}之^ヲ力^上。況富^ル者^ハ、隨^テ緣^ニ自

然^ウ殖^ユ善^種、貧^ノ者^ハ、觸^レ事^ニ不^ル慮^ハ犯^ス罪^根。故^ハ或^ハ說^キ閻

浮提^ノ衆生^ハ多^ク由^テ貧^ニ墮^ト惡^道、又^ハ演^リ諸^苦ノ中^ニハ、以^テ貧^苦ニ

55 為^ト第一^ノ苦^ト云々。因^テ茲^ニ、早^テ祈^テ福^徳之一^門、欲^フ成^ト大願^ヲ於

二世^ニ。然^今此^ニ菩薩^者象^リ宝^部摩^尼門^ニ。持^シて如意^宝

珠^ノ玉^ヲ、衆^生ニ与^ヘ財^福、行^者ニ滿^ツ諸^願一矣。經^云、若^於此

生^ノ中^ニ、欲^フ求^テ現^報諸^ノ惡^業薄^福衆^生ニ充^滿セシメト世

出^世間^ノ無^上ノ果^報一切^ノ所^望一文^ヲ。如^儀軌^云、誰^ノ有

60 薄^福者[、]当^ニ滿^ツ一切^ノ願^ヲ文^ヲ。隨^心如^意輪^經云[、]是

能^ク雨^ス於^無量^ノ財^宝、如^意宝^珠也。速^ニ得^ル世^間

一切^ノ財^故文^ヲ。又^云、我^速令^得美^妙七^宝衣^服飲

食^及妻^子眷^屬車^乘城^邑滿^足一取^意。此^則

於^テ此^ノ如^意輪^ニ懸^レ馮^ヲ作^一花^一香^一善^ニ之^彙、摸^シ

65 形^ヲ凝^テ信[、]運^ニ一称^一礼^一善^ノ之^族、窮^テ王^家之^懷富^ヲ、

縱^ハ輪^王數^万之^福利^ヲ、豊^ニ人^臣之^資財^ニ、預^ラム^ニ居

「(第三紙、二二三函三五号断簡)

士至億之良財^一。茲以、矜季倫之福庭^一、飾^{カサ}錦障
於五十里之地^一、遊^テ須達之財苑^一、披^{ヒラカ}花堂於四十
余之院^一。然則、六度四接者、始自初門、満足^シ之^一、
70百福万德者、迄^{イタル}于極位^一、仍各以伽陀、
可讚歎禮拜。頌曰、

持宝蓮勝幢 幢中出妙声 誰有薄福者 当願一切願

南無歸命頂礼大慈大悲大聖如意輪觀自在菩薩

第三往生極樂門者、前^ニ明^ツ今^ノ生^ノ所^ノ求^ヲ。今願^{ハム}來^セ世^ノ

75出離^ヲ。如經云、非^ス但^レ現^ニ世^ニ得^ミ大福利^ヲ、亦於^ニ当^ニ生^ニ獲^ト

大功德^ヲ。夫以^{ミレハ}、名利^ハ生死^ノ之^ニ絆^ヲ、結^フ三塗^ノ之^ニ鉄網^ヲ。道

心^ハ菩提^ノ之^ニ翅^ヲ、輪^ニ九品^ノ之^ニ金台^ニ。然我等^等著^{シテ}妖艶^ノ之

色声^ニ、盛^{サカ}ナル^ニ、齡^ハ稍^シ闕^ク、婪^ム邪慢^ノ之^ニ名利^ヲ、余命^ハ愈^イ疚^{マル}。

悲哉、被^テ拘^エ小緣^ニ、乍^ニ思^ハ徒^ラ送^リ星霜^ヲ、迷^ヌ哉、怖^ケ求^{シテ}

80世間^ニ乍^ニ空^ク運^ラ年月^ヲ。實^ニ可^ク厭^ム者^一、三^ニ界^ノ六^ノ道

之^ノ栖^カ也。惡^キ趣^ニ易^カ婦^ニ故^一。尤^モ可^ク欣^ム者^一、九^ノ品^ノ十^ノ樂^ノ之^ニ台^ナ

也。不^ハ欣^ム淨^土難^シ生^ル故^也。然^レ今^ニ此^ノ菩^ツ薩^者、為^{シテ}船^師

大^ノ船^師、渡^シ中^ニ有^ル之^ノ迷^津、為^{シテ}導^師大^ノ導^師、送^ル

西方之覺岸^ニ矣。安養^ニ号^{シテ}、弥陀^ト、設^ケ行願莊

85 嚴之淨土^ヲ、娑婆^ニ現^{シテ}觀音^ト、迎^テ欣求極樂之

衆生^ヲ。是以、十念成就之終^ニ、捧^テ蓮台^ニ而迎接^シ、

九品往生之始^ニ、轉法輪^ヲ而教化^ス。何況、無障礙

經^ニ、捨^キ此身後、則生^{スト}西方^ニ、金輪呪經^ニ、演^{タリ}命終^{シテ}

往生^{スト}極樂世界^ニ。我等^ニ有往生極樂之願^ニ。觀

90 音^ニ在引撰西方之盟^ニ。我^ヲ所^ノ發^ス願望[、]已^ニ叶^{ヘリ}彼

所立之本誓^ニ。往生^{コト}淨土^ニ、有何疑^ニ哉。然則、苟^モ

詣^テ、黃金瑠璃之庭上^ニ、瞻^リ觀音紫摩之聖

容^ヲ、忝^{ナク}跪^テ、赤栴檀林之樹下^ニ、拜^{セム}弥陀白毫之

妙相^ヲ。即聞^テ一実^ノ道^ヲ、断^シ三重^ノ無明^ヲ、終^ニ開^テ仏^ノ知

95 見^ニ、入^{ラム}菩薩^ノ正位^ニ。出離生死^ノ大願^已滿足。世

々生々大幸、何事^カ如^ク之^ニ哉。仍各住決定往

生之願、可讚歎^テ拜^テ弥陀觀音。頌曰、

願以此功德 普及於一切 我等与衆生 皆共成仏道

南無帰命頂礼大慈大悲大聖如意輪觀自在菩薩

」(第四紙、現装第二紙)

」(第五紙、現装第一紙)

〈二一五函一二号〉

【書誌】

卷子装一卷。文和四年（一三五五）の書写奥書有り。室町期の書写。

料紙、楮紙打紙。第八紙のみ料紙異なる（楮紙）。各紙糊剥がれ。

法量、縦 三一・〇糎。横 三五四・〇糎（八紙継）。各紙は、①四六・二糎、②四七・〇糎、③四七・〇糎、④四七・〇糎、⑤四七・〇糎、⑥四七・〇糎、⑦四六・八糎、⑧二六・〇糎。

第一紙より第七紙まで界線有り（界高二六・四糎、幅二・九糎）。

軸有り、木製、直径一・二糎、長さ三一・八糎。

一部文字に声点有り。博士無し。

第八紙の端裏に「此式解脱房草敷」と墨書。

第七紙の紙背に「這裏一卷奉寄進大應寺常住／寛永八年十月十五日／山村 栄智／平沢 三良衛門／定門」と墨書（本文とは別筆）。

【翻刻】

1 如意輪講私記

先惣礼

婦命蓮花王 大悲觀自在 大自在吉祥

能施有情願

5 南無婦命頂礼大悲大慈大聖如意輪

觀自在尊十方法界一切三宝

敬白大恩教主釈迦牟尼如来十方三世

一切三宝、殊大慈大悲觀自在尊補陀洛

山無数聖衆ニ而言、伏惟ハ、人中天上之浮

10 花開落幾ノ春ノ風ソ。苦海愛河之流水

沈浮^{オホカ}絞^{オホカ}ノ夕浪^{オホカ}。善趣^{ニハ}難^ク生^シ、惡道^{ニハ}易^ク歸^ル者也。

粵^ロ稀^ニ受^ケ日域馬台之人身^ヲ、償^マ遇^ヘ月支

鵝王之教跡^ニ。然^ニ歲^ニ月^ニ消^ケ、孰^レ期^ニ翼^ノ日^之

晷^{カケ}。冥路^ニ稍^ヤ近^ク、須^ク蓄^ク夜台之粮^ヲ。爰^コ以^テ、偏^ニ仰^テ

15 一尊之級引^ヲ、願^フ捧^{ント}二世之雍熙^ヲ。夫十

方聖衆之中ニハ、觀自在ノ慈悲惟深重ナリ。六

觀世音ノ内ニハ、如意輪ノ利生尤掲焉ナリ。繇ニ是ニ

今翅テ一座三門之講肆ヲ一、早ク預ムニ求

願之満足ニ。眼前ニハ誇テ不老之赤泉ニ、伴ヒ椿葉

20之影ニ、身後ニハ遊ニ迎接之紫台ニ、候ン荷花之

敷ヲ一。懇篤ノ志、不ニ能ニ叢脞スルニ。具旨在仏陀之

照覽ニ而已。

今此講演略有三門。一者本願利益門、二者

如意福德門、三往生極樂門也。

25第一本願利益門者、夫此菩薩者、侍テ多

千億ノ仏ニ、発シ大清淨ノ願ヲ一、垂憐愍ノ方便ヲ一、

施降化ノ神力ヲ一。慈悲之雲眇々トシテ、普澍

甘露之法雨ヲ一、弘誓之海漫々トシテ、広ク浮濟

度之船筏ヲ一。無縁之慈悲廣大ニシテ、無親モ無シ

30疎モ。無作之誓願甚深ニシテ、無始モ一無ニ終モ。本願

云、一切衆生作シニ仏ニ畢テ後、我当ニ成仏ス。若

残ニ一人モ一者、誓フ四不三取ヲニ正覚ヲ一云々。又如經云、若

醍醐寺藏 貞慶作三段式『如意輪講式』解題と翻刻

」(第一紙)

持念^ハ如意輪^ヲ者、一切ノ時処^ニ皆無^三有^{コト}障礙^一。

於^テ内外ノ行業^ニ、速^ニ圓滿^{シテ}、於諸ノ所作ノ事^ニ、常^ニ

35 得^エ勝利^ヲ。威光增長^{シテ}、具^シ大自在^ヲ、開發^{シテ}智恵^ヲ、

得^エ弁才語言^ニ三昧^ヲ。音声美妙^{シテ}、過現^ノ

一切ノ罪障無^ク不^ス滅^セ、現当^ノ一切ノ吉祥無^{シト}不^云至^一

云々。凡誓願ノ利益無量ナリ。以^テ要^ヲ一言^ニ之^一、三

業六情之罪垢、智水洗^テ而不留^ヲ。四重

40 五逆之業塵、悲風払^テ而無殘^{コト}。況滿^テ

壽命^ヲ於千歲^ニ、招^マ敬愛^ヲ於万人^ニ。才智

湛^ヘ北海^ヲ、巧弁流^ス懸河^ヲ。何況、雖決定業^{ナリ}、

念^レ能^ク轉^シ之^ヲ、雖^ト惡道^ニ、必代^テ受^ク苦^ヲ。

然則、振^テ十力折伏^ノ之威^ヲ、窺^テ獄率^ヲ摧^キ

45 刀山^ヲ、施^テ二子慈悲之德^ヲ、代^テ罪人^ニ入^ル鉄

城^ニ者也。經云、若誦^{コト}如意輪神呪^ヲ一遍^{セハ}

如^ク上ノ諸事皆悉^ク得^ニ成^弁文^一。又云、假令^ハ仏

眼^ハ墮^ニ落^{シテ}大地^ニ、無量億劫^ニ不^ト還^ラ本處^ニ、大

悲^ノ誓願不墮^ニ兩舌^ニ。又、若有衆生^ニ、於未

」(第二紙)

50 來世^一、誦持^セ此呪^ニ者、以^ノ本願^ヲ故、我來^テ其^ノ

人^ノ前^ニ、隨所望^ノ意^ニ、令^ム滿一切無量^ノ大願^ヲ。

若^ハ少若^ハ多、不果遂其^ノ悉地^ヲ者、不得^三名^ニ。ナツクル
コトヲ
二

為如意宝珠大秘密呪^ト文。如是、誓願不

思議甚深^{ニシテ}、無量廣大也。金言不誤^一、キンゲン

55 利生無疑。仍大眾以伽陀可讚嘆礼拝。

頌曰、

若我誓願大悲中 一人不成二世願

我墮虛妄罪過中 不還本覺捨大悲

南無歸命頂礼大慈大悲大聖如意輪觀自在尊

60 第二如意福德門^ト者、先^ニ明本誓悲

願。今祈^{ラン}福德^ノ利益^ヲ。夫翼^ト樹提伽之勝

躡^ヲ、開^キ福田於即生^ニ、伝迦羅越之妙指^ヲ、

招^{カム}宝財於現身^ニ。於焉、幸福^ヲハ尤可^三願^ニ之^ヲ。

貧賤^ヲ誰不^{ラシ}厭^ニ之^ヲ。是以菩薩^ノ六度^ニハ闕^{カキ}檀

65 度之濟行^ヲ、止觀^ノ五緣^ニハ失^フ衣食之助道^ヲ矣。

出^ハ瞻^ミ二肩^一懷^イ劣^レ等輩^ニ之恥^ヲ、入^ノ屈^テ二膝^一無^シ下^下顧^ル。

醍醐寺藏 貞慶作三段式『如意輪講式』解題と翻刻

」（第三紙）

親屬^ラ之力^上。況^ト富^ル者^ハ、随^テ縁^ニ自然^ニ殖^ス善^種ラ、
貧^者ハ、触^テ事^ニ不^レ慮^ル一^ヲ犯^ス罪^根ラ。故^或ハハ説^キ閻^浮提^ノ
衆^生ハ多^ク由^テ貧^ニ墮^ト二^ニ惡^道ニ、又^演タリ^下諸^苦ノ中^ニハ以^テ貧

70 苦^ヲ為^ト中^下第一^ノ苦^ト上^云々。因^茲、早^祈テ福^德之一^ニ

門^ヲ一、欲^フ成^ト大^願於^二世^ニ一。然^今此^菩薩^者象^{カケト}レリ

宝^部摩^尼門^ニ。持^{シテ}如^意宝^珠ノ玉^ヲ一、衆^生ニ与^ヘ二

財^福ヲ一、行^者ニ滿^ツ諸^願ヲ一矣。經^云、若^於此^生ノ中^ニ一、

欲^フ求^ト現^報ラ一諸^ノ惡^業薄^福ノ衆^生ニ充^滿セシメント世^ヲ

75 出^世間^ノ無^上ノ果^報一^ニ一切^ノ所^望ヲ一^文。如^儀軌^云カ一、誰^カレ^ノ

有^下薄^福者^上、当^ニ滿^ツ一^切ノ願^ヲ一^文。随^心如^意輪^經

云、是^能雨^ス於^無量^ノ財^宝ヲ一^如意^宝珠^也。

速^ニ得^ル世^間ノ一^切ノ財^ヲ一^故文。又^云、我^速ニ令^得美^ス

妙^ノ七^宝衣^服飲^食及^妻子^眷屬^車

80 乘^城邑^滿足^{スル}コトヲ取^意。此^則於^テ此^ノ如^意輪^ニ一懸^ス

馮^ヲ一^作一^花一^香ノ善^ヲ一^之彙^{、摸}シ形^ヲ一^凝信^{一、}

運^一称^一一^礼ノ善^ヲ一^之族^{、窮}ハメテ^王家^之懷^富ヲ一、

縦^ホシイマ、ニシ^テ輪^王數^万之^福利^ヲ一、豊^ニシテ^人臣^之資^シ

「(第四紙)

貯^{チヨ}、預^ヨ居士至德之良財^ニ。茲以、矜^{ワコツ}季倫之

85 福庭^{フクテイ}、飾^{カサ}錦障於五十里之地^ニ、遊^テ須達

之財苑^ニ、披^{ヒラカ}花堂於四十余之院^ニ。然則、

六度四接者、始自初門^ニ滿足^シ之^ヲ、百福万

德者、迄^{イタル}于極位^ニ円満^ス之^ヲ。仍各以伽陀、

可讚歎禮拜。頌曰、

90 持宝蓮勝幢 幢中出妙声 誰有薄福者

当滿一切願

南無歸命頂礼大慈大悲大聖如意

輪觀自在菩薩

第三往生極樂門^ト者、前^ニ明^ツ今生^ノ所

95 求^ヲ。今願來世^ノ出離^ヲ。如經云、非^ス但現世^ニ

得^ノニ大福利^ヲ、亦於当生^ニ獲^ツ大功徳^ヲ。文。夫

以、名利^ハ生死^之絆^ニ、結^フ三塗^之鉄網^ヲ。道

心^ハ菩提^之翅^ハ、翰^ニ九品^之金台^ニ。然我等

著^{シテ}妖艶^之色声^ニ、盛^{ナル}齡稍闌[、]婪^テ

100 邪慢之名利^ヲ、余命^ニ愈^ク疚^{マル}。悲哉、被^テ

」(第五紙)

醍醐寺藏 貞慶作三段式『如意輪講式』解題と翻刻

拘カエニ小縁ニ一乍思徒ヲニ送リニ星霜ヲ一、迷哉、怖求シテ

世間ニ一乍啞ナケムナシ空ク運フ年月ヲ一。実ニ可厭ヘキ者ハ、三

界六道之栖カ也。悪趣ニ易スキ帰ル故。尤可欣一

者、九品十樂之台ナ也。不ハ欣一淨土ニ難生

105 故也。然今此菩薩者、為シテ船師大船師ト、

渡シニ中有之迷津ヲ一、為シテ導師大導師ト、送ル

西方之覺岸ニ一矣。安養ニハ号シテ彌陀ト一、設ケ行

願莊嚴之淨土ヲ一、娑婆ニハ現シテ觀音ト一、迎フ欣

求極樂之衆生ヲ一。是以、十念成就之終ニハ、捧テ

110 蓮台而迎接シ、九品往生之始ニハ、轉法輪ヲ

而教化ス。何況、無障礙經ニハ、説キ捨此身後、

則生スト西方一、金輪呪經ニハ、演タリ命終往生スト極

樂世界ニ一。我等ニ有往生極樂之願一。觀音ニ

在引接西方之盟チカヒ一。我ヲカ所ノ發ス願望、已ニ叶ヘリ

115 彼ノ所立之本誓一。往生コト淨土ニ、有何疑一哉。

然則、苟イヤシクモ詣テ、黄金瑠璃之庭上ニ、

瞻ミタテマツ觀音紫摩之聖容ヲ一、忝カタシケナク跪テ赤梅檀

」(第六紙)

林之樹下^ニ、拜^{セシ}弥陀白毫之妙相^ヲ。即聞^テ

一実^ノ道^ヲ、断^シ三重^ノ無明^ヲ、終^ニ開^テ仏^ノ知見^ヲ、入^{ラシ}

120 菩薩^ノ正位^ニ。出離生死^ノ大願已^ニ満足^ス。世々

生々^ノ大幸、何事^カ如之^ニ哉。仍各住決

定往生之願^ニ、可讚歎礼拜弥陀觀音。

頌曰、

願以此功德 普及於一切 我等与衆生

125 皆共成仏道

南無壽命頂礼大慈大悲大聖

如意輪觀自在菩薩

文和第四之曆、黄鐘十八之

天、於醍醐山积迦院馳紫毫了。

雖恥當時之口遊後昆嘲為自行扣

金池之薄水染半柱而已。

微徳沙門□□

「(第八紙)

「(第七紙)